

続・楽しい植物 観察入門

身近な有毒植物 20 種・植物名の由来



弊社ホームページに、本冊子をオールカラーで掲載しております。

[大日本図書 TOP](#)>[小学校関連または中学校関連](#)>[理科](#)>[授業に役立つダウンロード資料](#)>続・楽しい植物観察入門

続・楽しい植物観察入門

● 目次 ●

はじめに 1

身近な有毒植物20種

校庭や公園でよく見かける有毒植物

①アジサイ	2
②カロライナジャスミン (チョウセンアサガオ)	3
③チューリップ	4
④フクジュソウ	4
⑤スイセン (ヒガンバナ)	4
⑥アサガオ (マルバルコウソウ)	5
⑦スズラン	6
⑧キョウチクトウ	6
⑨エゴノキ	7
⑩オシロイバナ	7
⑪ウメ・アンズ・モモ・ビワ・スモモ	8
⑫サクラソウ	9
⑬ジンチョウゲ (ミツマタ)	9
⑭ナンテン	10
⑮アセビ	11
⑯クサノオウ (タケニグサ)	11
⑰ニシキギ	12
⑱ザクロ	13
⑲ランタナ	13
⑳ノウゼンカズラ	14

植物名の由来

1 植物名からわかること 15

2 植物名は由来がわかれば覚えやすい

①ハナゾノツクパネウツギ	17
②ピロードモウズイカ	17
③ヘチマ (カラスノエンドウ・スズメ ノエンドウ・カスマグサ)	18

3 大きさが名前の由来

①カラスウリとスズメウリ	19
②ヒメオドリコソウとチゴユリ	20

4 姿、形が名前の由来

①オドリコソウ	21
②ヤブレガサ	21
③コバンソウ	22
④カズノコグサ	22
⑤タコノアシ	22
⑥スカシユリ	23
⑦ハナイカダ	23
⑧ヒトリシズカ	24

⑨サルスベリ	24
⑩ネムノキ	25
⑪オオバコ	26
⑫タケニグサ	27
⑬イカリソウ	27

5 匂いや味が名前の由来

①ヘクソカズラ	28
②クサギ	28
③スイバ	29
④ガマズミ	29

6 生息場所が名前の由来

①ハキダメギク	30
②サクラ	30
・フジザクラ	
・ソメイヨシノ	
・オオシマザクラ, エドヒガンザクラ	
・カワヅザクラ	
③ミゾソバ	33

7 人々の生活との関わりが名前の由来

①タネツケバナ	33
②ミソハギ	33
③クスノキ	34
④フキ	34

8 身近な植物名の由来一覧 (五十音順)

○木の名の由来 35

・アカシデ	・クルミ
・アカメガシワ	・コナラ
・イチヨウ	・サザンカ
・イヌシデ	・サンショウ
・ウツギ	・タイサンボク
・エゴノキ	・ツバキ
・エノキ	・ネズミモチ
・カキ	・ハギ
・カツラ	・ハゼ
・キンモクセイ	・ヒノキ
・クヌギ	・モチノキ
・クリ	

○草の名の由来 36

・アイ	・エビネ
・アザミ	・オオバコ
・アマドコロ	・オヒシバ
・アヤメ	・カヤツリグサ
・イタドリ	・セイタカアワダチソウ
・イチハツ	・ハコベ
・イノコズチ	・ヨメナ
・エノコログサ	・ヨモギ

はじめに

植物は人々の生活に深く関わり、人々と身近なところで一緒に暮らし、共存してきました。特に、里山文化が維持されていた昭和の中頃までは、都会においても、野草を摘んで食卓に並べたり、年中行事に植物が利用されたりしてきました。

その後、経済の高度成長に伴い、利便性と消費が優先され、商品の大量生産と経済・文化のグローバル化が進みました。また、薪や炭、石炭に代わり、石油やガソリン、原子力などへエネルギーの著しい転換も起きました。

その結果、手間のかかる野草料理は勿論、堆肥づくりや薪炭材として利用してきた里山の雑木林から人々は離れてしまいました。また、外国からの安価な木材輸入により、日本の林業の勢いが抑えられてしまいました。それらの結果、山の森や里山の雑木林との関わりが薄くなることは、植物と人々の関係が疎遠になることを意味しています。



植物と人々の生活とのつながりの深さを示す雑木林

生物界において、植物は生産者で、動物などの消費者の餌になります。自然界において、植物と動物はとても密接な関係で共存しています。ですから、シカやクマなどの大型野生動物や野鳥、昆虫の研究では、餌に関係する植物の調査を疎かにできません。植物の生態

などを調べることで、動物の生態がわかってくるのです。

植物は、生物界の土台をつくっていますので、植物について学ぶことは、動物や植物たちの多様な世界を学ぶことに通じます。そのことは、植物や動物が人々の生活とどのように関わってきたかを学ぶことにもなります。その植物を学ぶ最初の扉が、「植物観察」なのです。

植物観察の大切な視点は、2011年に発刊した「楽しい植物観察入門」で、レーチェル・カーソンの伝える“感性”を中心に、植物が私たちに語りかけている言葉を聞きとる方法について紹介しました。また、植物と人の暮らしとの関係についても紹介しました。2013年に発刊した「楽しい自然観察入門」では、花と果実の形態学的特徴や植物と昆虫、野鳥との関係、そして、植物と楽しく遊ぶ方法を紹介しました。さらに、本誌では、植物観察で注意したい毒草についてまとめ、よく質問される身近な植物の名前の由来を紹介しました。

本誌を含む3冊の資料が、人々と疎遠になりつつある植物と読者とのつながりを深めることにお役に立てれば幸いです。



本誌と関連した植物観察冊子：大日本図書
(大日本図書ホームページからダウンロードいただけます。)

身近な有毒植物 20種

毒草は、身近なところに多く生息しています。山で見かけるトリカブト（キンポウゲ科）はよく知られた毒草ですが、公園や野原で見かける同じ科のフクジュソウやキツネノボタン等も毒草です。秋に咲くヒガンバナ（ヒガンバナ科）は毒草として知られていますが、春の花壇で見かける同じ科のスイセンも毒草です。また、夏の野山に咲くヤマユリ（ユリ科）の花の美しさに見とれ、ユリ根を食べる人たちも、同じ科のスズランが毒草と知って驚きます。垣根に使うオオムラサキ（ツツジ科）の仲間の蜜は舐めることがありますが、高原で見かける同じ科のレンゲツツジや、庭に植えられるアセビは有名な毒草で、食べると嘔吐や痙攣を起こします。古代ギリシャの軍人で歴史家のクセノフォンは、兵士がレンゲツツジやハナヒリノキ（ツツジ科）の蜜で中毒を起こしたことを伝えています。



ハイキングで見かけるレンゲツツジは毒草

また、ウメやアンズの実の中の種子を食べると、含まれている青酸配糖体のアミグダリンが胃の中で加水分解されてシアン化水素（HCN）が生じ、青酸性の毒で呼吸困難に至ることもあります。同じことはイチヨウの種子のギンナンでも起きます。一度に数十個も食べて事故になった例があります。また、ア

ジサイの花や葉を食べた場合も、似た現象が体内で起きます。原因となった毒成分は解明されていませんが、料理の飾りにアジサイを使い、食中毒が起きた事故があります。

ここでは、よく見かける身近な植物の毒性を紹介します。毒草は、身近なところに、紹介しきれないほどたくさん生えています。しかし、不用意に食べたり、樹液（汁）を皮膚につけたりしなければ、安全に植物観察を楽しめます。身近な植物の毒性について学ぶことで、観察での事故を防ぎましょう。

また、種子の毒は、種子が完全に成熟すると無毒化することがあります。発芽能力がつくまで、動物に食べられないことを目的にしているようですが、子どもたちに「植物はなぜ毒をもつのか」について考えさせることも忘れないでください。一方で、毒成分は薬の成分にもなります。植物の毒が私たちの生活に役立っていることも忘れないようにしたいものです。

校庭や公園でよく見かける有毒植物

①アジサイ（ユキノシタ科）

有毒部：全株（特に葉、蕾、根）
 毒成分：青酸配糖体，アルカロイド
 症状：嘔吐，めまい，顔面紅潮

1920年、アメリカでアジサイの仲間の植物を、家畜が食べて中毒を起こしたとき、青酸配糖体が含まれていたと誤って伝えられたことから、アジサイの毒は青酸配糖体と考えられてきました。



写真1：食中毒を起こすこともあるアジサイ

しかし、中毒を起こす毒成分は未だ明らかになっていません。実際、中国のアジサイの葉や茎から新しく6種類の青酸配糖体が発見されましたが、日本のアジサイから青酸配糖体は発見されませんでした。その後、多くの種類のアジサイで調べられましたが、青酸配糖体が発見されたりされなかったりと、品種や生息地によってまちまちです。また、含まれているアルカロイド系の毒の可能性もあり、アジサイの毒性についてはわからないことが多くあります。

ただし、2008年にアジサイが原因と思われる中毒事故が、日本で2件起きています。その毒成分は明らかにされていませんが、食べることは避けたほうがよさそうです。

②カロライナジャスミン（マチン科）

有毒部：全株（特に花）

毒成分：ゲルセミン、ゲルセミン、
センペルビン

症状：運動失調、嚥下困難、痙攣発作、
呼吸麻痺

ジャスミン（モクセイ科）の花は、お茶の香りづけに使われて無毒ですが、カロライナジャスミンは名前が似ていることからジャスミンと間違えて使われ、花をお茶にして飲み、中毒を起こした例があります。

毒成分のゲルセミンはアルカロイドの仲間

で、有名なトリカブトの猛毒成分アコニチン（アルカロイド）と同等の強い毒性をもっています。お茶として飲まないように気をつけてください。



写真2：カロライナジャスミンは茶にならない毒草
(提供 コーベット・フォトエージェンシー)

アルカロイドとは「アルカリ性のもの」という意味で、通常は窒素（N）を含んでアルカリ性を示しますが、中性のものもあります。ケシの果実の汁から抽出されたモルヒネが、アルカロイドの仲間です。タバコのニコチンも、アルカロイドの仲間の毒です。また、南米産のコカの葉に含まれるコカインも有名なアルカロイドですが、コカイン同等に副交感神経系に作用して幻覚や嘔吐、意識障害、呼吸困難などを起こすのが、家庭園芸で人気のナス科のチョウセンアサガオの仲間に含まれるトロパンアルカロイドとよばれる毒です。この毒は、江戸時代、外科医であった華岡清洲が、母と妻に使った麻酔薬の「通仙散」です。アルカロイドの毒は、多くの植物に含まれています。



写真3：アルカロイドの猛毒をもつチョウセンアサガオ

③チューリップ (ユリ科)

有毒部：全株（特に球根）
毒成分：ツリパリ
症状：嘔吐、めまい、顔面紅潮



写真4：チューリップの球根は皮膚炎を起こす

どこでも見かけるチューリップには、特に球根に皮膚アレルギーを起こすツリパリが含まれています。傷のある球根から出る汁に長く手を触れていると、指先などに重い皮膚炎が生じます。外国では、この症状をチューリップ・フィンガーとよんでいます。また、花にはチューリップインという心臓毒があり、血圧低下や嘔吐、呼吸困難を引き起こします。茎にもツリパリとよばれる心臓毒があり、両種の毒は大量に摂取すると、人体に影響が出ます。

これらのなかでも、球根に含まれるツリパリによる事故が最も起きやすく、注意が必要です。球根に触れるとき、幼児や皮膚の弱

い人は、必ず手袋を着用したほうがよさそうです。なお、球根を誤食すると消化器系に影響が出るといわれていますが、人の場合、数十個以上食べない限り、影響は出にくいようです。

④フクジュソウ (キンポウゲ科)

有毒部：全株
毒成分：強心配糖体のシマリン、
アドニトキシン
症状：嘔吐、呼吸困難、心臓麻痺

キンポウゲ科の植物は、どの種類も毒草ですから要注意です。特に有名なのはトリカブトで、その毒のアコニチンは、手足のしびれや痙攣、不整脈から意識不明を起こさせる猛毒です。アイヌの人々が矢じりにこの毒を塗り、クマ狩りをしていたそうです。

庭や公園で見かけるフクジュソウは、トリカブトに匹敵するくらいの毒草で、含まれているシマリン、アドニトキシンの強心作用は、心臓麻痺を起こさせる猛毒です。フクジュソウの若芽をフキノトウと間違えることがありますが、絶対に食べてはいけない植物です。

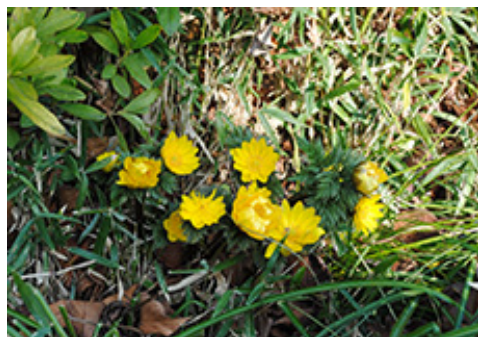


写真5：猛毒もつフクジュソウ

(提供 東京都調布市武者小路実篤記念館)

また、同じキンポウゲ科のキツネノボタンやイチリンソウなどがもつ毒も、心臓に影響を及ぼしたり、汁によって皮膚炎を起こしたりします。

⑤ スイセン（ヒガンバナ科）

有毒部：全株（特に球根（鱗茎））
 毒成分：アルカロイドのリコリン
 症状：嘔吐，下痢，発汗，頭痛，昏睡，
 切り口から出る乳液で皮膚炎



写真6：早春の庭に咲くニホンスイセン

ヒガンバナ科の植物はその殆どが毒草で、アルカロイドの毒があります。庭で見かけるアマリリスやナツズイセン，里山に咲くキツネノカミソリ，彼岸の頃に咲くヒガンバナ，海岸に咲くハマユウ等，紹介すればきりがありません。春浅い頃から咲き始めるスイセンの仲間も，リコリンを全株にもっています。

春の山菜採りで，スイセン（ニホンスイセン）の球根（鱗茎）をノビルと間違えたり，葉をニラと間違えたりして中毒を起こす例があります。また，株の切り口から出る乳液には，シュウ酸カルシウムが含まれていて，皮膚炎を起こします。皮膚の弱い人や幼児は注意が必要です。園芸種として人気のあるラッパスイセンにも同じ毒性がありますので注意してください。

また，よく知られているヒガンバナ（ヒガンバナ科）の毒成分は，スイセンと同様，アルカロイドのリコリンです。茎から出る汁は，皮膚炎を起こし，誤食すると嘔吐，下痢，中枢神経麻痺が起こったり，死亡したりすることもあります。この花が墓地に多いのは，球根（鱗茎）に猛毒が含まれているので，動物

によって地面を掘られ，墓を荒らされることがないからだといわれています。また，植物学者の前川文夫氏によると，ヒガンバナは稲作の伝承と同時に大陸から日本に入って来た「史前帰化植物」で，田圃の畦に多いのはその証拠だそうです。さらに，昔から畦に有毒植物のヒガンバナが多いのは，墓地と同様，ヒガンバナが植えられていれば，動物によって畦の土が掘られ，壊されることがないからという説もあります。毒草と共存する昔の日本の里山生活の姿が思い浮かぶ話です。



写真7：ヒガンバナ科の代表のヒガンバナ

⑥ アサガオ（ヒルガオ科）

有毒部：種子
 毒成分：配糖体のファルピチン
 症状：腹痛，下痢，嘔吐

アサガオは，平安時代初期に薬として大陸から日本に入ってきました。その後，江戸時代中期に園芸種として品種の改良が行われ，人気が出ました。その人気は，昔から続く「朝顔市」などの夏の風物詩に象徴されます。



写真8：種子に毒のあるアサガオ

アサガオの種子には、配糖体の毒の仲間のファルピチンが含まれています。この毒には、強い下痢を起こさせる作用があります。大人が種子を7粒ほど飲むと症状が出るといわれていて、生薬の牽牛子けんこうしに利用されますが、素人が扱うのは危険です。子どもが種子を飲んでしまい、中毒を起こすこともあります。

また、野原に咲くコヒルガオにも同じ毒性があり、強い下痢を起こさせる配糖体の毒のコンボルブリンが根に含まれているので、注意が必要です。

園芸用として植えられている同じヒルガオ科のルコウソウやマルバルコウソウも、有毒で注意が必要です。また、名前の似たナス科のチョウセンアサガオは全株に猛毒があります。



写真9：アサガオと同じ毒をもつマルバルコウソウ

一般に、子どもが種子などを誤食した場合は、応急処置として水を多めに飲ませ、指を口に入れて吐かせるのがよいのですが、毒草による事故に遭遇した場合の対処の方法を、日頃から医師などの専門家と話し合っておくことも大切です。

⑦スズラン (ユリ科)

有毒部：全株（特に花、根）
 毒成分：強心配糖体のコンバラトキシン、コンバラサイド
 症状：強心、利尿、血液凝固、心不全

スズランが毒草であることは、比較的知られています。しかし、山菜採りなどで食用のアマドコロやナルコユリ、ギョウジャニンニクと間違え、中毒を起こす事故が多いので注意が必要です。園芸用として庭や公園などで見かけるドイツスズランにも同じ毒性があります。



写真10：入笠山に咲く野生のスズラン

コンバラトキシンやコンバラサイドには、強心作用や利尿作用のある毒草のジキタリス（ゴマノハグサ科）がもつ毒と同じような毒性があります。

「鈴蘭根」という生薬がありますが、強心作用や利尿作用がありますが、素人の扱いは無理です。また、ドイツスズランをコップに生けて、その水を飲んで中毒を起こした例もあるそうです。

⑧キョウチクトウ (キョウチクトウ科)

有毒部：全株（特に種子と樹液（乳液））
 毒成分：強心配糖体のオレアンドリン
 症状：頭痛、嘔吐、めまい、痙攣、意識障害

夏に赤や白の花を咲かすキョウチクトウは、校庭や公園などでよく見かける木です。成長が早く、木陰をつくることから、夏の木として人気があります。また、排気ガスに強いので、道路脇の緑化にも使われています。



写真11：夏に花が目立つキョウチクトウ

しかし、有毒な木として、取扱いには十分な注意が必要です。特に、枝や葉、種子を口にくわえるだけで中毒を起こすといわれています。野外での食事で、枝を箸や串として使い、中毒を起こした例が知られています。毒性は強く、痙攣から意識障害へと重篤な症状を引き起こすので注意が必要です。また、枝を燃やした煙を吸うことでも中毒を起こすといわれています。

キョウチクトウ科で人気があるのは、ニチニチソウやツルニチソウですが、どの種も有毒です。それぞれ毒成分は違いますが、嘔吐や痙攣などの症状が起きるので、注意が必要です。また、同じキョウチクトウ科のテイカカズラもよく見かけますが、茎から出る乳液は皮膚炎を起こします。

⑨エゴノキ (エゴノキ科)

有毒部：果実

毒成分：サポニン

症 状：のどや胃の炎症・溶血作用, 魚毒



写真12：丸い果実が目立つエゴノキ

エゴノキは、雑木林でよく見かけますが、公園などにも多く植えられています。初夏には、小型の白い花が目立ちます。果実にはサポニンが含まれていて苦く、食べるとのどを刺激して“えぐい”ので、“えぐい木”からエゴノキになったといわれています。サポニンを含む果実をつぶして水に入れると泡が出るので、「石鹼の木」ともよばれています。他にムクロジ（ムクロジ科）もサポニンを含んでおり、石鹼代用となります。

サポニンには、咳止めや去痰作用があって薬剤になりますが、素人が扱うとのとどや胃壁の粘膜に炎症を起こしたり、赤血球が溶ける溶血作用が起きたりして大変危険です。また、サポニンは魚毒ともいわれ、エゴノキの果実をつぶし、池や川のよどみで流すと、魚は果実中のサポニンの影響で呼吸ができなくなり、浮いてきます。きれいな水で鰓を洗えば生き返りますが、現在はこのような漁法は禁じられています。小さな池の岸辺にエゴノキを植えると、果実が池に入り、魚に影響を及ぼすことがあります。人が果実を食べる機会は少ないと思いますが、シャボン玉を上手につくるために、つぶした果実を石鹼水に混ぜることがあるそうです。この石鹼水を口に入れないうように、注意してください。

⑩オシロイバナ (オシロイバナ科)

有毒部：全株（特に根、種子）

毒成分：トリゴネリン

症 状：嘔吐, 腹痛, 下痢

果実の白い胚乳を、おしろいの粉代わりとして遊ぶことから、オシロイバナの名があります。しかし、その果実や根に毒成分のトリゴネリンが含まれています。トリゴネリンが嘔吐や下痢などの中毒症状の直接の原因になっているか明らかになっていませんが、果実

や根の誤食には注意が必要です。



写真13：遊びに使われる毒草のオシロイバナ

オシロイバナは南米原産で、江戸時代に日本に入ってきましたが、赤色や黄色、白色の花を咲かせ、現在も観賞用として人気があり、公園や庭、校庭など、多くの場所に植えられています。おしろいの他に、果実のなる子房の膨らんだ部分と花被の部分とを少し離し、雌しべ、雄しべにひっかけて落下傘にして遊ぶこともあります。種子の部分を口に入れないうえ、よく観察してつけてください。中国では、有毒な根を薬にしたそうですが、日本ではその例はないようです。

なお、オシロイバナの果実の果皮のような黒い皮は萼で、花卉のように見える部分も萼ですので、よく観察してみてください。詳しくは「楽しい植物観察入門」で説明していますので、参考にしてください。

⑪ウメ・アンズ・モモ・ビワ・スモモ

(すべてバラ科)

有毒部：未熟な果肉（特に種子）

毒成分：青酸配糖体のアミグダリン

症状：嘔吐、動悸、めまい、痙攣

いずれも果実がなる木として、また、ビワを除けば花も観賞できる木として人気があり、どこでも見かけます。食用として果実酒やジャムなどにこれらの果実を利用していますが、古くから「ウメやアンズは枝から落ちた果実を食べ、枝になっているものは食べるな」と

いわれています。これは、枝に残る成熟していない果実の果肉や種子に、毒成分の青酸配糖体のアミグダリンが含まれるからです。

アミグダリンそのものでは毒の被害はないようですが、体内に入ると、酵素によって加水分解され、猛毒のシアン化水素（HCN）を発生させます。この物質には、皆さんがよく知っている青酸カリと同じ作用があり、人や家畜を呼吸困難から死に至らせる危険性があります。ウメ、アンズに限らず、同じ危険性はモモ、ビワ、スモモにもあります。ただし、熟していない“青梅”がもつ毒性は、梅酒などに加工すればなくなります。

また、これらの植物と同じ危険性のあるのが同じバラ科のカリンです。しかし、果実酒や蜂蜜漬、砂糖漬けのお菓子などに加工されれば安全です。もっとも、未成熟な硬い果実を食べることはないと思いますが、念のため注意してください。



写真14：果実酒などに利用されるウメ

なお、これらの植物は、薬にも活用されています。ウメにはクエン酸が多く含まれていますので疲労回復に役立ち、カリンは風邪をひいたとき、咳やのどの炎症を抑えます。また、アンズの種子は「杏仁」として、モモの種子は「桃仁」として漢方薬に使われます。このように、多くの植物は毒と薬の両刃の成分をもち合わせているのです。

⑫ サクラソウ (サクラソウ科)

有毒部：葉や茎、花柄の腺毛
 毒成分：プリミン
 症状：皮膚炎（かゆみ、水疱）

日本の野生種のサクラソウの自生地としては、埼玉県「田島ヶ原」が有名です。自生地一帯のサクラソウは、国の特別天然記念物に指定されています。そこでは、荒川の河川敷に江戸時代から咲き続けるサクラソウの群落を観察できます。普通、公園や花壇で見かけるのは園芸種のサクラソウで、プリムラという総称で販売されている種類です。特に、この園芸種に注意が必要です。

おもに、葉や茎、萼、花柄に生える腺毛に含まれるプリミンが皮膚炎を起こさせます。腺毛に触った手や、その手が触れた顔や手足に、1～2日間後にかゆみや発疹が生じ、ひどい場合は水疱ができることもあります。株の手入れにはゴム手袋が必要です。特に、幼児や皮膚の弱い人は注意が必要です。最近は無毒（プリミン・フリー）の園芸種のプリムラが販売されていますので、その株で花壇づくりをするのもよいでしょう。



写真15：茎や葉の汁が手に炎症を起こすサクラソウ

⑬ ジンチョウゲ (ジンチョウゲ科)

有毒部：全株（特に果実）
 毒成分：クマリン配糖体のダフネチン
 症状：口内炎、皮膚炎

ジンチョウゲは、垣根に使われる低木として人気があります。花の香りがよく、公園や学校など多くの場所で見かけます。また、繊維が強いので、ネパール地方ではジンチョウゲを紙の原料にしているそうです。日本では、同じジンチョウゲ科のミツマタで和紙をつくりませんが、ジンチョウゲで紙づくりに挑戦してみたいかたがでしょうか。

ところで、ジンチョウゲは全株に毒性があり、樹液に触れると皮膚炎を起こし、果実などを誤食すると口内炎や胃炎を起こすので注意が必要です。ジンチョウゲは雌雄異株で、幸いなことに日本で見かけるのは雄株が殆どで、雌株はあまり見かけません。ですから、果実を見かけることも殆どありませんが、稀に果実ができる株もあるそうですから注意してください。



写真16：皮膚炎に注意したいジンチョウゲ

先に紹介したミツマタも、公園や庭先でよく見かけます。ミツマタは、お札になる和紙の原料として有名です。枝が三又に連続して分枝するので、この名があります。ミツマタは、ジンチョウゲ同様に毒草です。ミツマタの毒成分もクマリン配糖体的一种といわれていますが、よくわかっていません。花には香りがあり、部屋に飾ることもありますが、花は勿論、全株に毒があり、誤食すると腹痛、血便、身体硬直などの症状が出ます。



写真 17：和紙の原料のミツマタ

このほかのジンチョウゲ科の植物も毒草が多く、注意が必要です。石灰岩地帯に生えるオニシバリは、繊維が強く“鬼をも縛れる”ので、この名があります。全株が有毒で、誤食すると腹痛、血便、胃炎の症状が出ます。北日本で見かけるナニワズは、夏に落葉するので「ナツボウズ」とよばれています。夏に赤い果実ができますが、誤食すると口内炎や胃炎、身体硬直を起こします。また、樹液に触れると皮膚炎を起こすので注意が必要です。

身近な植物であるジンチョウゲは、その花の香りが春を告げてくれるので、多くの人々に親しまれています。部屋に飾ることもよくあります。恐れることはありませんが、有毒植物であることは忘れないでください。

⑭ナンテン（メギ科）

有毒部：全株（特に果実）

毒成分：ナンジニン，ドメスチン

症 状：痙攣，運動神経麻痺，呼吸麻痺

ナンテンは“難を転じる”に通じるとされ、古くから縁起のよい植物として、庭先に植えられています。しかし、果実などに猛毒のアルカロイドのドメスチンを含む毒草であることは、あまり知られていません。ナンテンの赤い実は、鳥が食べるから安全と思われるかもしれませんが、鳥は消化管が短く、種子を噛み砕くことが少ないので、毒の吸収がなく、影響が少ないといわれています。野生動物が

食べるから安全という保証はどこにもありませんから、注意してください。

山菜採りに出かけた人が、山でニホンザルが食べていたケシ科のタケニグサの新芽を安全だと思って食べてしまい、食中毒になった例もあります。タケニグサには、アルカロイドの毒が数種類含まれていて、誤食すると嘔吐や血圧低下、低体温になり、呼吸麻痺を起こすこともあります。

ナンテンには、全株にドメスチンが含まれていますが、特に、果実に多いので注意が必要です。この毒を多量に摂取すると、神経系、特に呼吸中枢を麻痺させて呼吸を止めてしまいます。しかし、薬としては鎮咳作用があり、咳止めの飴などに利用されています。

赤飯弁当などにナンテンの葉を載せるのは、葉に含まれるナンジニンが加熱されて水分が加えられると、分解して猛毒のチアン水素が発生し、腐敗防止のはたらきをするからです。また、武家屋敷では、かわや（便所）の外にナンテンが植えられていました。これは、毒味をする武士が、ナンテンの葉を食べて毒を消し、嘔吐することで難を逃れるために植えられたと伝えられています。昔の人たちは、生活の知恵として、毒草の性質をうまく利用していたのです。



写真 18：葉が防腐に使われるナンテン

ナンテンは、食用にはまったく向かない植物で、赤い実も観賞用に楽しむのはよいのですが、子どもが遊びで食べないように注意して

ください。

⑮アセビ (ツツジ科)

有毒部：全株（葉，花，樹皮など）
 毒成分：苦みの成分のアセボトキシン
 症 状：腹痛，嘔吐，下痢，神経麻痺，
 呼吸困難

アセビを食べると足がしびれて歩けなくなることから“足しびれ”が名の由来といわれています。実際，葉や花，樹皮などにアセボトキシン類の毒成分を含んでいて，人以外にも馬や牛，羊が食べると嘔吐，下痢の他，神経麻痺を起こして酔ったような歩き方になるので，「バスイボク（馬酔木）」の名もあります。アセビには他に「馬殺し」，「牛殺し」，「馬食わず」等の呼び名があります。どれも，含まれている毒の症状に関わることがわかります。

奈良公園のアセビは大木になっています。これは，シカが毒性を知っていて食べないからといわれています。春に白い小花を枝先に連ねて咲かせるので，人気がある庭木です。花を飾ることもあります，全株が有毒ですので，子どもなどの口に入らないよう注意が必要です。

殺虫剤のない頃は，葉や樹皮を煎じて，農家でその汁を殺虫剤に使ったり，便所のウジを殺すのに使ったりしました。観賞以外に，毒草と上手に共存していた時代があったのです。



写真19：観賞用として人気のある有毒のアセビ

アセビの他にも，ツツジ科には有毒植物が多くあります。ツツジもその1つで，羊がツツジを食べると，足踏みをしてうずくまってしまうので，「躑（てき）躑（ちよく）」と書いてツツジと読んでいます。躑躑は足を止めることの意味で，アセビの毒の作用のことを表しています。そこで，羊の字を頭に置いた，「羊躑躑」もツツジと読みます。ツツジを食べると痙攣を起こし，歩けなくなるような状態になると，呼吸麻痺を起こして死に至ることが多いので，大変危険な植物です。

⑯クサノオウ (ケシ科)

有毒部：全株
 毒成分：アルカロイドのケリドニン，
 ベルベリン等
 症 状：皮膚炎，感覚末梢神経麻痺，
 呼吸麻痺，昏睡

ケシ科の植物には，その殆どに毒がありますから注意が必要です。クサノオウは，春から初夏にかけて，里山や林内の日当たりのよい場所でよく見かけます。4枚の花弁が十字に似ているので，無毒のアブラナ科の植物に間違えて誤食し，事故が起きる場合があります。



写真20：陽当たりのよい里山の道端や林内でよく見かけるクサノオウ



写真21：クサノオウに似た毒をもつタケニグサ

クサノオウの茎などを折ると、オレンジ色の乳液が出てきます。乳液にはアルカロイドのケリドニン等、さまざまな毒成分が含まれ、触ると皮膚炎を起こすことがあります。また、山菜と間違えて誤食すると、胃壁がただれたり、昏睡状態になったりすることがあります。

クサノオウは、「タムシバ」、「イボグサ」ともよばれ、葉のしぼり汁が皮膚病の治療やイボとりに使われましたが、素人が扱うのは危険です。

同じケシ科の身近な植物に、タケニグサがあります。荒れ地や日当たりのよい場所によく見かける植物で、背丈は2m以上になることもあります。

タケニグサは花卉をもたず、ケシ科の他の植物と同様、2枚の萼は開花時に落ちてしまい、雌しべや多数の雄しべが線上に伸びて目立ちます。クサノオウと似て、アルカロイドの毒を全株に含んでいます。茎や葉を傷つけると、苦みの強いオレンジ色の乳液が出ます。この乳液は、皮膚病のタムシや水虫に効くといわれていますが、素人の利用はやめましょう。また、誤食すると酔ったようになり、嘔吐や血圧・体温低下から昏睡状態になる危険な植物です。ケシ科の植物の毒性には要注意です。

⑰ニシキギ（ニシキギ科）

有毒部：全株（特に種子）

毒成分：種子の脂肪油のトリグリセロール

症状：嘔吐，下痢，腹痛，運動麻痺

ニシキギは、秋の紅葉が美しく、錦色になることがその名の由来です。庭木として人気があり、公園や校庭などいろいろな場所に植えられています。枝にコルク質の翼があるのが特徴です。秋に赤い果実ができますが、果実に含まれる脂肪油に毒があります。果実などを誤食すると、腹痛、嘔吐、下痢などを起こし、ひどい場合は運動麻痺を起こします。昔は、果実を砕いて、頭髮用の油に混ぜ、毛じらみなどのシラミとりに使われました。このことが、別名の「シラミコロシ」の由来となっています。



写真22：赤い果実が猛毒のニシキギ

同じニシキギ科で、枝に翼のないコマユミやマユミの果実も有毒なので、注意が必要です。両種とも、果実にアルカロイドのエボニ

ンを含みます。この毒は、ニシキギの果実と似た症状が出るので危険です。マユミの若芽や葉は食用になりますが、ニシキギの若芽や葉は、食用にはなりませんから、誤解のないようにしてください。

⑱ザクロ（ミソハギ科）

有毒部：樹皮，根皮

毒成分：アルカロイドの一種

症 状：嘔吐，めまい，下痢

ザクロは、西アジアよりシルクロードを通過して、平安時代に日本に渡来したといわれています。果実の中に大量の種子ができ、ヨーロッパではこれを子孫繁栄に例えて、果実を結婚式に使います。また、鬼子母神の境内には、ザクロが必ず植えられています。その理由は、「楽しい植物観察入門」に載せていますので参考にしてください。

樹皮や根皮にアルカロイドの毒があります。古くは皮を煎じて飲み、虫下しの駆虫剤（ザクロヒ）に使いました。しかし、副作用が強く、飲むと嘔吐やめまい、下痢の症状が出ますので、素人の扱いはやめましょう。

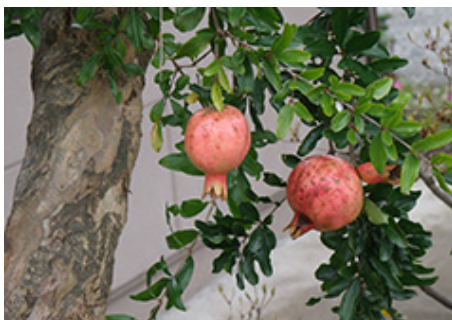


写真23：樹皮や根皮に毒があるザクロ

近年、ザクロが注目されたのは、果実に含まれるエストロゲン（卵胞ホルモン）の一種のエストロンが、女性の更年期障害に効果があると報告されたからです。ザクロジュースが売れすぎて、店頭から姿を消したこともありましたが、しかし、その含有量は微々たるも

ので、個人差もあり、毎日大量のザクロジュースを飲んでも、効果は少ないようです。

通常、樹皮や根皮が有毒な植物は、果実に強い毒性があるものですが、種類によってそれぞれ違います。種類に応じた多様な有毒植物の特性をしっかりと把握しておきましょう。

⑲ランタナ（クマツヅラ科）

有毒部：葉，特に未成熟な種子

毒成分：ランタニン（ランタデンA）

症 状：激しい嘔吐，下痢

初夏から秋にかけて多数の花を咲かせるランタナは、花の色が外側から内側にかけて変化するので、「七変化」ともよばれています。開花期が長いことと、美しさから人気があり、公園や庭先、校庭によく植えられています。

果実は、成熟すると黒くなり、毒性は幾分衰えますが、ままごとなどの遊びで子どもが誤食して中毒になることがあります。特に、緑色の未成熟な果実の種子には、ランタニンが多く含まれ、毒性が強いため注意が必要です。誤食すると激しい嘔吐や下痢を起こし、幼児では重篤な症状になる危険があります。



写真24：未成熟な果実に毒があるランタナ

ランタナは、繁殖力が強く、暖かい地域では屋外でたくさんの株がまとめて植えられているのを見かけます。また、屋内でも鉢植えとして見かけます。身近な植物ですが、有毒植物として、あまり知られていない種類ですので注意してください。

⑩ノウゼンカズラ（ノウゼンカズラ科）

有毒部：全株（特に花）

毒成分：アレルギー物質のラパコール

症 状：樹液で皮膚炎を起こす

ノウゼンカズラの葉や枝，花卉に含まれる樹液に，ラパコールが含まれているといわれています。ラパコールは，皮膚炎や鼻炎を起こす物質です。また，樹木を枯らす腐朽菌の働きを抑制する作用もあります。



写真25：樹液に毒があるノウゼンカズラ

ノウゼンカズラに有毒性があるか否かは，論議されることがあります。しかし，皮膚炎などは人によって症状の発症率が違いますので，油断は禁物です。花を乾燥させて利尿剤に使った時期もあったようですが，副作用が強いので現在は利用されていません。また，子どもが花で遊んでいたときに樹液が眼に入って炎症を起こし，まぶたが腫れる事故があったそうです。眼に樹液が入った場合は，真水ですぐに洗うようにしましょう。

朱色の花が真夏の庭園でよく目立ち，人気のある蔓花ですから，身近な場所でよく見かけます。花が大きく開かず，先だけ小さく開き，下部が筒状になったアメリカノウゼンカズラもよく見かけます。この株もノウゼンカズラ同様に注意してください。

〔身近な有毒植物に関するおもな参考資料〕

●Web

- ・厚生労働省ホームページ 自然毒のリスクプロファイル
- ・東京都福祉保健局ホームページ 間違えやすい有毒植物
- ・(財)日本中毒情報センターホームページ

●著書

- ・身近にある毒草100種の見分け方 全園社 :1988: 中井将善著
- ・日本の有毒植物 学研:2012: 佐竹元吉監修
- ・食用・薬用野草ハンドブック 農業図書 :1977: 森下啓一監修
- ・薬用植物辞典 五月書房:1985: 村越三千男 著
- ・牧野新日本植物図鑑 北隆館:1961: 牧野富太郎著

(本誌掲載の「科」は本図鑑を基本にした)

植物名の由来

1 植物名からわかること

植物は、古くから人々の生活と関わってきました。その関わりが多様性が深まれば深まるほど、便宜上、幾つもの名前を付けて、植物を区別する必要性が生じてきたと考えられます。特に大切な食料としての関わりでは、その味や効用、危険性などを名前に付けて区別することで、多くの人々に伝えてきたのだと思われまます。

例えば、アマチャヅル（ウリ科）は噛むと甘みを感じます。ゲンノショウコ（フウロウソウ科）は整腸剤として効用があり、煎じて飲んだ人の病が目の前で治ることから、「ゲンノショウコ（現の証拠）」と名付けられました（写真1）。また、有毒で危険なドクゼリ（セリ科）は初夏に背丈を伸ばし、根が緑色で太く短い節をつくることで、春に育つひげ根のセリ（セリ科）と区別されています。古くから、「カッコウ鳴いたら、セリ食うな」といわれます。これは、カッコウが鳴く初夏になると、ドクゼリが背丈を伸ばして目立つようになり、セリと間違えやすいので、セリは食べないほうがよいという意味です。名前でも、食用になるセリと有毒なドクゼリを区別しているのです。ところで、セリは背丈



写真1：薬草の効用が名の由来のゲンノショウコ

がよく伸び、他の植物と競り合うように育つことから「セリ（競り）」とよばれています。

その他、日常の生活に関わる例では、鎌の柄に使う固い木として「カマツカ（バラ科）」の名があります。また、「ムラサキ（ムラサキ科）」や「アカネ（アカネ科）」は、根を紫色や赤色の染料として使えることが名前の由来です。さらに、弓矢に適している笹竹は、「ヤダケ（イネ科）」と名付けられました。ケイ酸を含み、固い葉で家具を研磨するのに使う草には、「トクサ（砥草）（トクサ科）」という名もあります。家具職人の仲間内では、古くから「桐の筆筥は砥草で磨いて、棕の葉で仕上げる」という言葉が残されています。ケヤキ（ニレ科）に似たムクノキ（ニレ科）の葉は、表面がざらつき、トクサと同じように紙やすりとして使われてきました。ムクノキの“ムク”とは「木工」の意味です。

このように、植物名は人々の生活との関わりの中かで、用途に応じて付けられた例が多いのですが、「サギソウ（ラン科）」や「トンボソウ（ラン科）」のように、姿・形や色が名の由来になったものや、「ハルジオン（キク科）」や「アキノキリンソウ（キク科）」のように、花の咲く季節などが名の由来になっている例もあります（写真2）。



写真2：鷺の飛ぶ姿に似るサギソウ

以上のことからわかるように、植物名は人々との関わりの中かで、その植物を他の植

物と区別するために、各々の植物の特徴をよく表しているともいえます。従って、植物名の由来を学ぶことは、その植物の特徴を学ぶだけでなく、その植物と人々との関わりを学ぶことにもなります。その関わりからは、民俗学的な事象を学ぶこともできます。

その例に、ツバキ科の「サカキ」と「ヒサカキ」があります（写真3）。サカキは常緑の木で、いつも緑の葉をもつことから「栄える木」が名の由来となっています。また、ヒサカキは、サカキに似ているがサカキではないことから、“サカキに非ず”で「非サカキ」とよばれたり、姿・形が小さいので「姫サカキ」とよばれたりしています。このことは、ヒサカキの名はサカキの名を基に付けられたものであることを示しています。



写真3：サカキ（左）とヒサカキ（右） 関東から北ではヒサカキをサカキの代用としている

ところで、サカキは神の世界と人間の世界を分ける木の意味で、「境の木」ともよばれています。また、枯れることなく、いつも青々と葉が茂っていることが神の存在を思わせるのか、神事にはサカキが使われます。しかし、サカキが生息していない関東から北では、サカキの代わりにヒサカキを神事に用います。ヒサカキも手に入らない、さらに北側では、ヒノキやスギを使います。サカキが使われるのは、関西や九州地方の暖かい地方になります。この事実は、神事に関わる文化の発祥地は九州など南の国々で、やがて北へ伝わってきたことを示しています。このように日本の文化の大きな流れを植物名から推測す

ることもできるのです。

名は体をあらわします。植物名の由来について考えることは、その植物の姿、形の特徴だけではなく、その植物が背負っている人々との関わりを探ることにもなります。植物名を暗記して覚えることには意味がありません。植物名が私たちに語っているその名の背景を理解することを通して、先人たちの知恵を学ぶことが大切なのです。植物名の由来を調べる目的は、疎遠になりつつある植物と人々との関わりを見直すことにあります。植物名を理解することで植物への親しみを深め、植物との共生のあり方を学ぶ機会にしたいものです。

2 植物名は由来がわかれば覚えやすい

「植物の名前をなかなか覚えられなくて…」と嘆く人は多いと思います。日本には種子植物だけでも、約5,000種が生息しています。これらの名前を全て覚えるのは大変です。そこで、名前を覚える“コツ”を5つ紹介しましょう。

- (1) 地域を限定（学校、公園、散歩コース等）して、そこに生息する植物の名を最初に覚える。
- (2) 最初は、身近な植物を100種覚えることを目標とし、次に200～300種を目標とする（約300種覚えると、植物観察会の講師が務まるといわれています）。
- (3) 初心者は季節別、場所別に植物が紹介されている植物図鑑を利用する。できれば、写真で紹介されているもののほうがよい。
- (4) 観察会などに参加し、後日、同じコースを歩きながら、学んだ植物名を再確認

する。

(5) 植物名の由来を学ぶ（植物名を思い出す助けとなる）。

以上の(1)～(5)のコツに優先順序はありません。ここでは(5)を中心に、身近な植物の名の由来を紹介することにしましょう。

①ハナゾノツクバネウツギ（スイカズラ科）

校庭や公園、家の庭など、どこでも見かける植木に「ハナゾノツクバネウツギ」という低木があります（写真4）。垣根などにも使われている木ですが、「アベリア」とよばれる園芸種といえば思い出す人もいるでしょう。ハナゾノツクバネウツギは、長すぎて覚え難いと思います。



写真4：アベリア（ハナゾノツクバネウツギ）

しかし、名前の由来を理解すると、一つひとつの言葉の意味がわかり、覚えやすいものです。“ハナゾノ”とは花がたくさん咲くことから「花園」を意味し、“ツクバネ”とは萼が羽根突きの羽に似ることから「突羽」を意味しています（写真5）。また、“ウツギ”は「空木」と書き、茎の中が空洞になっていることを意味しています（写真6）。つまり、「花園のように花がたくさん咲き、萼は羽根突きの羽に似て、茎の中は空洞の植物」という意味で、ハナゾノツクバネウツギなのです。長い名前も、名前の由来や意味がわかると覚えやすくなります。



写真5：ハナゾノツクバネウツギの萼



写真6：ハナゾノツクバネウツギの茎

短い植物名には、「クワ（クワ科）」があります。“お蚕さんが食う葉”がクワになったといわれています。「クスノキ（クスノキ科）」は樟脳などの薬の原料なので、“薬の木”がクスノキになりました。カエデは葉の形が「カエルの手」に似ることから、モミジは秋の紅葉が美しく錦の色が「揉み出でる」の意味で、古くは「紅葉つ（もみつ）」とよんだものがモミジになりました。「ツタ」は、茎が幹や建物の壁を“伝わる”ことからツタとよばれています。

植物名のこのような由来を思い出せば、忘れそうになった植物名が脳裏に浮かんでくると思いませんか。忘れた植物名にたどり着くために、「名前の由来」を是非調べてみてください。その植物への親しみが深まり、より一層、植物名を覚えやすくなると思います。

②ビロードモウズイカ（ゴマノハグサ科）

長い名で覚えにくい例に、「ビロードモウズイカ」があります。明治時代にヨーロッパから渡来し、観賞用に植えられました。現在では、荒地や道端に生え、初夏に黄色の花を咲かせます。背丈が2mくらいになるので

よく目立ちます (写真7)。



写真7：背丈が高く、よく目立つビロードモウズイカ

葉や茎に灰白色の短毛が“ビロード”のように生えているので、ビロードが名の頭に付きます。ビロードという部分は全体の姿から覚えやすいのですが、問題は“モウズイカ”の由来です。モウズイカを漢字で書くと「毛蕊花」となります。「蕊」とは雄蕊おしべ、雌蕊めしべの蕊すいのことです。花をよく観察すると、雄蕊にたくさんの毛が生えていることがわかります (写真8)。そこから毛蕊花の名が付いたのです。ビロードモウズイカの名前の由来がわかると、この植物の名前が花の特徴や葉や茎の姿の特徴をよくあらわしていることに気づき、名前を覚えやすくなりませんか。



写真8：雄しべに毛があるビロードモウズイカ

③ヘチマ (ウリ科) とカスマグサ (マメ科)

笑い話のような名前の由来もあります。ヘチマは昔、「トウリ」とよばれました。インドから渡来したウリ科の植物で、果実の繊維

から糸がとれたので、「糸瓜いとわり」とよんだのがトウリと転訛したようです。さて、そのトウリの“ト”は「いろはにほへと ちりぬるを…」の歌のなかで、“へ”と“ち”の間にあります。つまり、「へとちの間」なので「へち間」となり、ヘチマとよばれるようになったのです (写真9)。同じような由来が、春に咲くマメ科のカスマグサにもあります。



写真9：昔はトウリとよばれたヘチマ

植物の名前では、大きいことの意味で“カラス”が使われます。カラスノエンドウは、よく知られたマメ科の植物です (写真10)。花や姿が大きく目立つのでこの名があります。



写真10：赤紫の大きい花が目立つカラスノエンドウ

同じ時期、同じような場所でやや乾燥したところを好む紫色の小さい花をつけるスズメノエンドウを見かけます (写真11)。カラスノエンドウと比較すると花が小さいので、名前に“スズメ”が使われます。



写真11：小さい花をつけるスズメノエンドウ

ところで、カスマグサの花は、カラスノエンドウやスズメノエンドウと同じマメ科ですから、似た花が咲きます。花の大きさは、カラスノエンドウとスズメノエンドウの中間の大きさです。つまり、“カラス”と“スズメ”の中間の大きさの花を咲かせるので、“カ”と“ス”の間の意味で「カスマグサ」とよばれるのです（写真12）。



写真12：カラスとスズメの間の意味のカスマグサ

外見の類似は、花だけでなく果実（豆果）にもいえます。カラスノエンドウは、種子が6～8個できますが、スズメノエンドウは2個しかできません。カスマグサは両種の中間の3～4個できます。

ヘチマもカスマグサも“マ”の意味は「間」だったのです。花の名前の由来がわかると、花の名前を思い出しやすくなり、結果として覚えやすくなります。

私たちが日頃見かけるほとんどの植物の名前には、由来があります。なかなか、由来がはっきりしない植物もありますが、名前を付

けたのは人間ですから、色や姿、大きさなどの印象や、人々の生活との関係などから名前が付けられたと考えられます。植物の名前の由来を学ぶことは、名を付けた人々の心境や、その植物の特徴を理解にすることにもなり、機械的に名前を覚えようとするより、名前が覚えやすくなっています。

ここで、名前の由来についてもう少し紹介しますので、植物の名前を覚える際の参考にしてください。

3 大きさが名前の由来

①カラスウリ（ウリ科）とスズメウリ（ウリ科）

“カラス”と“スズメ”は、植物の名前の頭によく使われます。先に紹介した通り、カラスは大きいことの意味、スズメは小さいことの意味で使われます。秋になると、赤ん坊の握りこぶしぐらいの赤い果実をつけるカラスウリを見かけます（写真13）。



写真13：遠くからも目立つ大きいカラスウリの果実

一方、カラスウリより小さくて丸い果実をつけるのがスズメウリです（写真14）。秋に果実ができますが、赤くならず、灰白色になります。果実の大きさの違いから、この名前が付きまして。



写真14：カラスウリより果実が小さいズメウリ

ところで、カラスウリの果実と同じくらいの大きさの果実をつける植物に、キカラスウリ(ウリ科)があります。秋にできる果実は赤く熟さず、黄色くなるのでこの名前が付けられました。果実の色が名前の由来になっています。

キカラスウリの根から採ったデンプンは、「てんかふん天瓜粉」とよばれ、あせもの予防として赤ん坊などに塗る白い粉になります。また、カラスウリの根は、「おうかこん王瓜根」とよばれて利尿剤に使われ、果実はしもやけの薬に使われました。

②ヒメオドリコソウ(シソ科)とチゴユリ(ユリ科)

春の野原や畑の縁には、小さな赤紫の花を咲かすヒメオドリコソウの群落をよく見かけます(写真15)。酸性の土壌を好んで多くの場所に生え、畑や花壇の雑草とよばれています。同じ仲間のオドリコソウ(シソ科)は、背丈が40～50cmにもなります(写真16)。ヒメオドリコソウは、この植物に比べると小さくて可愛いので、この名前が付きました。“ヒメ”とは姫の意味で、可愛いや小さいことの意味で付けられました。



写真15：小さく可愛い姫の意味のヒメオドリコソウ



写真16：姿の大きいオドリコソウ

同じように小さくて可愛いことが名前の由来になっているのがチゴユリです(写真17)。山で見かける同じユリ科のヤマユリ(写真18)に比べると、極めて小さく、他の草で隠されています。「チゴ」とは稚児の意味で、この植物の大きさが名前の由来になっています。森の中でチゴユリの群落に出会うと、お祭りの稚児行列のようです。



写真17：小さく可愛い稚児の意味のチゴユリ



写真18：姿が大きく目立つヤマユリ

4 姿、形が名前の由来

①オドリコソウ (シソ科)

オドリコソウは、「踊り子」が笠をかぶって踊る姿に、花の形が似ているのが名前の由来です。春から初夏にかけて林縁などで群落になっているのを見かけます (写真19)。遠くから見ると、アオジソ (シソ科) の群落に見えますが、下から覗き込むと美しい薄赤色の花が見えます。不思議なことに、場所によっては白色の花しか咲かない群落もあります。先に紹介したように、似た仲間のヒメオドリコソウは、姿が小さいのでその名があります。



写真19：踊り子の姿に似るオドリコソウ

②ヤブレガサ (キク科)

この植物ほど、その名の由来がすぐにわかるものはありません。春の雑木林の林床に、破れたから傘や雨傘を広げたような姿の植物を見かけます。四方に伸びた葉の姿から、「ヤブレガサ」の名が付けられました (写真20)。



写真20：破れたから傘に似るヤブレガサ

植物の名前がわからないとき、発見場所の環境 (河原、林床、田畑、湿地等) や花の特徴、その他の部分の形や姿、色、有毛か無毛かなどの特徴をノートに記録して、あとで名前を調べることがよくあります。ノートには、その植物が他のどんな植物に似ているかを記録することもあります。例えば、「花がシソに似る!」とか「シソモドキ」などとメモを残します。“モドキ”とは、似ていることの意味です。似た花が思いつかない場合は、勝手に自分で名前を付けて、その植物のイメージを記録します。そのような場合、この植物の名前を各自で付けると、ほとんどの人が「ヤブレガサ」と付けます。これほどイメージ通りの植物名は、他にはないかもしれません。

なお、ヤブレガサに似た植物で、葉が四方に伸びず、一方向だけ葉が伸びない種類があります。上から見るとモミジの葉に似ているので、「モミジガサ (キク科)」とよばれています (写真21)。ヤブレガサと同じような環境に育ちますので、ヤブレガサとよく間違えます。両種を並べて上から見ると、簡単に区別できますので比較してみてください。両種とも葉の形がその名の由来になっていることがよく理解できると思います。



写真21：ヤブレガサに似ているが、葉が四方に広がらないモミジガサ

③コバンソウ（イネ科）

初夏、日当たりのよい乾燥した野原や花壇に生える植物で、花や花軸等の小穂をつくる花が小判の形に似ているので「コバンソウ」とよばれています（写真22）。観賞用として、明治時代にヨーロッパから日本に渡ってきた帰化植物です。竹に小判がぶら下がった正月飾りのようです。



写真22：花が小判に似るコバンソウ

イメージ通りの名が付いているので、一度、その名を聞けば忘れることのない植物です。小穂が俵のようにも見えるので、別名「タワラムギ」ともよばれています。

コバンソウに似ていますが、垂れ下がる小穂が小さく、三角形に近い姿をしているのが、「ヒメコバンソウ（イネ科）」です。小穂をつくる花は小判に似ていませんが、全体の姿が小さなコバンソウに似ているので、この名が付けられました。コバンソウより古く、江戸時代にヨーロッパから日本に渡って来た帰化植物です。小穂の部分を振ると音がするので、「鈴萱すずかや」ともよばれています。

コバンソウよりも小穂が長い「ニセコバンソウ」もヨーロッパから渡来しました。コバンソウに似ていますが、小穂の細長さが偽物であることを示しています。アメリカではドライフラワーに使われ、人気があるようです。

④カズノコグサ（イネ科）

春の水田雑草の中にも、その姿の通りの名

が付いている植物があります。その植物は、茎の先に円錐状に花穂（穂のように咲く花）を咲かせ、たくさんの小穂を密につけます。やがてできた実の密についた姿が、ニシンの卵塊の数の子に似ているので「カズノコグサ」とよばれています（写真23）。この植物は、イネが大陸から日本に伝播してきたとき、イネと一緒に日本に渡って来たと考えられています。このような植物を、「史前帰化植物」とよんでいます。ヒガンバナやタカサブロウ等も史前帰化植物の仲間と考えられていて、水田雑草にはこの仲間が多いようです。



写真23：実のついた姿が数の子に似るカズノコグサ

カズノコグサは、春、田の土が掘り起こされる頃に芽を出し、田に水が引かれる頃には実ができています。やがて、落ちた実は水面に浮かび、広い地域に移動します。秋から冬は、土の中で休眠し、春の田植え前に発芽して成長し始めます。水田雑草の多くが、1年間の稲作の工程に合わせて暮らしています。稲作文化に適応した植物たちなのです。

⑤タコノアシ（ベンケイソウ科）

川や池の岸辺に生えるこの植物は、四方に分かれた茎の先に、花を並べてつけます。その姿がタコの足に似ているので、「タコノアシ」とよばれています（写真24）。水辺の草の向こうにこの植物を見かけると、まるで、タコが足を伸ばして岸辺に上がって来るよう

な錯覚にとらわれます。近年、河岸がコンクリート化されたり、湖沼の岸辺が乾燥化したりして、この植物を見かけることは稀になりました。絶滅が心配されている植物です。



写真24：絶滅が心配されるタコノアシ

背丈は30～80cmになり、花は黄白色5枚の萼片が目立ちます。花卉（花びら）はありません。花卉のように見えているのは萼片なのです。ベンケイソウ科の仲間は、葉が厚いのが普通ですが、タコノアシは葉が厚くならないことも特徴です。

⑥スカシユリ（ユリ科）

夏の海岸沿いの岩場や草地に見られる背丈が30～40cmのユリです。花（花被）は朱色で目立ちます。また、茎に稜があるのが特徴です。花被の基部は幅が狭いので、花を上から観察すると花被の基部に隙間ができます（写真25）。その隙間から地面が透けて見えるのも大きな特徴です。その姿から「スカシユリ（透かし百合）」の名が付けられました。



写真25：花被の基部に隙間のあるスカシユリ

本州北部から北海道にかけては「エゾスカ

シユリ」が咲き、山沿いでも関東地方では「ミヤマスカシユリ」が咲きます。また、園芸種でも多く見かけます。スカシユリは変種が多いユリです。

⑦ハナイカダ（ミズキ科）

森のやや日陰の場所に生える落葉低木で、背丈は1.5～2.0mになります。大きな特徴は、葉の上部中央に花が咲くことです。花が、葉の上に花柄もなく咲く姿から葉を筏（いかだ）に例えて「ハナイカダ」とよばれています（写真26）。雌雄異株で写真25の花は雄花です。雌花も、葉の上の同じ場所に咲きます。



写真26：花（雄花）が葉の上に咲くハナイカダ

葉の中央の葉脈（主脈，中央脈，中脈ともよぶ）をよく観察すると、葉の基部から花の位置までは葉脈が太く、花から葉の先端に向かう中央の葉脈は細くなっています。本当は花柄があるはずなのですが、中央の葉脈と花柄が合体したため、葉の上に直接、花が咲いているように見えるのです。

写真26の花は雄花です。夏には雌花に実ができますが、いかにも筏に船頭が乗った姿に見えます（写真27）。



写真27：実が筏の船頭に見えるハナイカダ

⑧ヒトリシズカ（センリョウ科）

春の雑木林などで、4枚の葉に包まれた白い花の集まり（穂状花穂）を咲かす植物に出会うことがあります。咲き始めの頃は背丈が低く、気付く人も少ないのですが、その可憐さに、一度見ると忘れられない植物になります。その姿から、源義経が寵愛した静御前に例えられて、「ヒトリシズカ」とよばれています（写真28）。花は、萼や花弁をもたず、1本の雌しべと子房の横腹から3本の雄しべを出します。多数の花から出る糸状の雄しべが、この花の美しさの源になっています。



写真28：静御前に例えられたヒトリシズカ

他に「ヨシノシズカ（吉野静）」とよばれることもあります。兄の源頼朝に追われ、陸奥の国（現在の岩手県）に義経が移るとき、別れを惜しんで吉野山で静御前が舞を舞った姿がその名の由来になっています。

どことなく哀愁をおびた花の名ですが、実際に咲いている場所では、一株で咲くことは珍しく、数十株が肩を寄せ合って咲いていま

す。一人で静かに咲いている状態ではありませんので、不幸な静御前を考えると寂しくないだろうと安心させられます。

また、春の雑木林では、ヒトリシズカと同じように4枚の葉に囲まれた中から、2本の柄に穂状の花の集まり（2本の穂状花穂）を咲かせるフタリシズカ（センリョウ科）（写真29）も見かけます。2本の柄に花が咲くので、1本のヒトリシズカに対して「フタリシズカ（二人静）」とよばれています。実際は2～5本も穂状の花穂をつけている株をよく見かけますので、その姿は2人で静かにしているようには見えず、「三人静」とか「四人静」と名付けたほうがよいように思えることがあります。花の咲き始めの頃は、背丈が30cm以上にもなりますので、背丈20cm以下のヒトリシズカとは区別できますが、初夏の頃には両者とも30～40cm以上になりますので、区別しにくいことがあります。頂上の対生する2枚の葉柄部分とその下で対生する2枚の葉の葉柄部分が接近して輪生のように見えるほうがヒトリシズカで、やや離れて輪生のように見えないほうがフタリシズカです。



写真29：穂状花穂が2本のフタリシズカ

⑨サルスベリ（ミソハギ科）

観賞用として庭木や公園、学校などに植えられています。また、街路樹などとしても植えられ、人気のある木です。成長すると幹の

皮が剥がれていかにも滑りやすく見え、サルも滑って木に登れない意味で「サルスベリ」とよばれています (写真30)。実際には手ごろな摩擦があり、人でも容易に登れる木ですから、名前の通りではないように思えます。



写真30：夏に咲くサルスベリの花

沖縄県などに自生する「シマサルスベリ (ミソハギ科)」を植物園などで見かけることがあります (写真31)。大変珍しい木で、絶滅の危機にたたされています。幹の皮が剥がれたようすは、本当にサルでも登りにくいだらうと思える木です。



写真31：絶滅に瀕しているシマサルスベリ

また、サルスベリによく似た木に「リョウブ (リョウブ科)」があります。雑木林などでよく見かける落葉樹ですが、幹の肌の模様がサルスベリによく似ています。冬の森でこの木に出会うと、サルスベリと間違えることがあります。ただ、この木も、幹肌の摩擦具合は人の木登りに適していますので試してみてください。

その他に、幹の皮が剥けて滑りそうなのが、

暖地に生息する「バクチノキ (バラ科)」や「カゴノキ (クスノキ科)」です。バクチノキは、博打に負けて服までとられ、身ぐるみ脱がされたようすが幹の皮が剥がされることに似るのでその名が付けられました (写真32)。カゴノキは、幹の皮が剥けた模様が、鹿の子の肌の模様に似ているので“鹿子の木”から「カゴノキ」とよばれています。森の中でこの木に出会うと、小鹿に出会った錯覚を体験できます。



写真32：幹を裸にされた姿に例えたバクチノキ

⑩ネムノキ (マメ科)

マメ科の植物は、根に根粒細菌をもっています。根粒細菌は空気中の窒素を同化して植物に供給し、植物からは光合成で得られた養分をもらって植物と共生しています。植物は根粒細菌のおかげで、養分の少ない土地でも生育できます。マメ科のネムノキやニセアカシヤなどは、土砂崩れで表土が崩れ去った場所や工事で表土が剥がされた場所などの養分の少ない荒地でもよく育ちます (写真33)。



写真33：道路工事跡の荒れ地で育つニセアカシヤ

また、ネムノキは荒地に限らず、宅地開発で表土が削られた場所などでもよく見かけます。花は淡い赤色で、夏の代表的な花として人気があります（写真34）。この花は日没前に咲き、夕暮れ時の色が鮮やかです。枝の先に1つの花の花弁が広がって咲いているように見えますが、5～6個の花が集まって枝先に咲き、頭状花序とうじょうかじょのような花の集団をつけます。ところで、羽状複葉の向かい合った小葉は、夕暮れ時になると互いに接してしまいます。水平に伸びていた葉が眠るように閉じてしまうことから「ネムノキ」の名が付けられました。花が元気に咲き始める頃、葉は寝始める奇妙な植物です。



写真34：眠るように葉を閉じるネムノキ

同じように根粒細菌をもつハンノキ（カバノキ科）も荒地でよく育ちます。育ったハンノキは葉を落とし、土地を肥沃にします。焼畑が行われていた頃は、焼畑耕作地の跡地にハンノキを植えて土地を肥やし、15年ほど放置したあと、再び焼き畑として利用してきました。最近、そのことが見直され、緑地化のためにハンノキが多くの場所で植えられています。

⑪オオバコ（オオバコ科）

山で道に迷い民家を探しているとき、オオバコが生えている場所に来れば人里が近いといわれています。オオバコの種子は、水に濡れると粘液で包まれて靴などの履物に付着し、

人の通る道に運ばれるので、人里近い山道にオオバコが生えるというわけです。

オオバコは大きな葉が目立ち、身近で親しみやすいので、子や児などの語を末尾につけ、“大葉の子”から「オオバコ」になったといわれています（写真35）。他に「カエルツパ（蛙葉）」や蛙の意味の“バコ”をつけて「オンバコ」ともよばれます。オンバコは、オオバコの名の由来とも考えられています。蛙に例えられるのは、葉を火で炙ると葉が風船のように膨らむことから、蛙がのどを膨らます姿に似ているからです。野草を食べることが流行っていますが、オオバコの葉を天ぷらにすることは葉に楊枝などを刺し、小さい穴を開けておかないと油の熱で葉が膨れ破裂するので危険です。また、カエルツパの名は、死んだ蛙をオオバコの葉で包むと生き返ることから付けられたともいわれています。



写真35：葉の特徴からカエルツパとよばれたオオバコ

オオバコはまた、「スモウトリグサ（相撲取り草）」ともよばれます。花茎をからませて相手の花茎を切る遊びをすることから、そのようによばれています。

最近の市街地では、オオバコの目立つ場所は少なく、葉の形がへら状になった「ヘラオオバコ」が目立ちます（写真36）。ヘラオオバコは、幕末にヨーロッパから日本に渡来した帰化植物です。なお、戦後、全身を白毛に覆われた北米原産の「ツボミオオバコ」が目

立ち始め、現在でも見かけることがあります。在来種のおオバコは、いつの間にか気付かないうちに、帰化種の仲間に追いやられてしまうのかもしれません。



写真36：葉がへら型のヘラオオバコ

⑫ タケニグサ (ケシ科)

竹と一緒に煮ると竹が柔らかくなって加工しやすくなることから、「タケニグサ（竹煮草）」とよばれています（写真37）。しかし、実際にそのようなことをする竹細工などの職人はいないようです。このことから、民俗学者の柳田國男は、彼の著書の「野草雑記」で「竹を煮ることの説」に異論を唱えています。

タケニグサの花には花弁がなく、ケシ科の特徴でもあるように萼はすぐに落ちてしまいます。花は残った雄しべ、雌しべでつくられています。茎は空洞で、遠目に見ると花や実がタケのそれに似るので、「タケニグサ（竹似草）」とよぶという説もあります。また、秋に実が熟す頃、風で揺れて実がぶつかり合うとガサガサいう音が出ます。このことから、「ササヤキグサ」や「ササヤキダケ」の別名もあります。

毒草の項で書いた通り、タケニグサは毒草の仲間です。全株にアルカロイド系の毒があります。誤食すると激しい嘔吐におそわれることもあります。また、茎や葉を折ると出るオレンジ色の汁は、水虫に効くといわれていますが、素人がむやみに取り扱うのは危険です。



写真37：茎が空洞で花がタケの花に似ることが名の由来といわれるタケニグサ

山肌などが露出した荒れ地に最初に芽を出す草ですが、種子の表面にエライオソーム（種冠）とよばれる栄養物質が付着しているため、それを餌にするアリが種子を運びます。日当たりのよい場所にはアリの巣があります。エライオソームの部分がアリに食べられ、必要な種子が巣の周りに捨てられるので、日当たりのよい荒れ地に素早く芽を出すのかもしれません。タケニグサと同じように種子にエライオソームをもつ植物は、スマレの仲間や同じくケシ科のムラサキケマン、そして初夏に黄色い花を咲かすクサノオウが有名です。詳しくは本誌と同シリーズの「楽しい植物観察入門」を参考にしてください。

⑬ イカリソウ (メギ科)

イカリソウは、春の雑木林や丘陵に淡い紫色の可憐な花を咲かせます。野草愛好家に人気があり、見つかりと持ち去られてしまうことの多い植物です。花の可憐さだけではなく、根などに滋養強壮作用があることも人気の理由です。

茎は三つ又に分かれ、その先に葉が3枚（合計9枚）出ることから、「三枝九葉草」ともよばれています。花が船に装備される錨に似ているので、「イカリソウ（錨草）」と名付けられました（写真38）。花の形の特徴から、一度覚えると忘れない植物名です。淡紫色の

花が普通ですが、稀に薄黄色の花があり、愛好家に喜ばれています。多くの場合、やや日当たりのよい場所や林縁に群生しているので、1株見つければその周辺に他の株が数株見つかります。



写真38：籐の形に似る花を咲かせるイカリソウ

5 匂いや味が名前の由来

①ヘクソカズラ (アカネ科)

植物の名前で、気の毒な名の代表にあげられるのが「ヘクソカズラ」です。林縁や公園の垣根などに見られるつる植物で、全株に独特な臭みがあり、その匂いから「屁糞蔓」の意味でヘクソカズラとよばれています (写真39)。“カズラ”とはつるのことです。確かに、匂いだけで名を付けるとそうなるかと、あきらめもつきます。



写真39：気の毒な名前のヘクソカズラ

しかし、花は可憐で清楚な感じを受けます。実際、その花の姿が清楚なので、「早乙女花」ともよばれています。初夏の田植えの時期に花が咲くので、花を、田植え祭りで苗を

植える早乙女に例えたのです。屁糞蔓とは天と地ほどの差がある名前です。

また、お灸の痕に花の模様が似ていることから「ヤイトバナ (灸花)」ともよばれています。“ヤイト”とはお灸の意味で、関西ではお灸をヤイトとよんでいます。晩秋の頃、茶色の実をつけるつる植物で、クリスマスリースなどの飾りに使われることもあります。名前と匂いさえ気にならなければ素敵な植物です。

②クサギ (クマツヅラ科)

夏、林縁や山道沿いの日当たりのよい場所や公園などで、白い筒状の花を咲かせている木を見かけます。筒の先は5つに裂け、その先に4本の雄しべと1本の雌しべが共に長く伸びて目立っています (写真40)。甘い独特の匂いを周囲に発して見つけやすい木です。大きな特徴として、葉を切ると独特の匂いがします。その匂いが臭いことから、“臭い木”で「クサギ」の名が付けました。



写真40：葉などの匂いが名の由来のクサギ

名前の由来がわかりやすい植物ですが、人によっては臭いどころか、ピーナッツバターのような甘い香りがして、クサギの名前が付くのはおかしいと主張する人もいます。昆虫たちも甘い匂いを感じるのか、アゲハチョウの仲間がよく飛来します。また、ハチに擬態したオオスカシバもよく飛来してきます。アゲハチョウを採集したり、生態写真を撮った

りするならば、クサギの下で待つのがよいと思います。

クロアゲハやカラスアゲハは、蜜や水を求めて決まったコースを巡回しています。そのコースを「蝶道」といいます。蝶道を調べた際、周辺に咲くクサギを巡回するようにチョウが回っていることに気づきました。蒸し暑い夏の野山や市街地で、アゲハチョウはクサギをオアシスのように利用して生活しているのです。そんな虫たちの気持ちを考えると、臭いからと馬鹿にできない木です。

③スイバ (タデ科)

夏の野外での活動は、熱中症が心配されます。野山や河原の観察会では適当な水分補給を怠ると、危険な事態になることもあります。のどが渴いたとき、水分補給にはなりません。唾液を出して一時的にのどの渴きを止める方法があります。その方法とは、スイバの茎や葉を噛むことです。

スイバは体内にシュウ酸を含み、噛むと酸っぱい味がします。その酸味が唾液を出し、のどの渴きを一時的に止めるのです。酸っぱい葉なので、“酸い葉”が「スイバ」になったといわれています (写真41)。スイバの別名には「スイツパ」や「ショツパクサ」などがあり、どれも酸味を意味しています。そのようななかでも有名なのが「スカンポ」です。スカンポの“ス”も酸味を意味しています。



写真41：酸っぱい葉が名の由来のスイバ

スカンポとよばれる別の植物が、タデ科の「イタドリ」です。痛み取りの効果があるので、“疼取り”からイタドリとよばれています。しかし、効果は定かではありません。スイバと同じようにシュウ酸を体内に含み、噛むと酸味があつて唾液が出てきます (写真42)。



写真42：スイバと同じく葉に酸味のあるイタドリ

④ガマズミ (スイカズラ科)

ガマズミは、雑木林や森の縁の日当たりのよい場所で見かける落葉低木です (写真43)。葉は対生し、初夏に白い小花を枝の先で散房状に多数咲かせます。葉の柄(葉柄)が目立たず、葉が小ぶりのコバノガマズミも同様な場所で見られます。



写真43：初夏に白い花を咲かすガマズミ

ガマズミは、秋に赤い実をつけます。その実が酸っぱいので、噛むと酸っぱいことから“噛む酸味”となり、「ガマズミ」とよばれるようになりました。

深山の老木は、幹の窪みに雨水が溜まることがあります。その溜まり水の中に、猿がド

ングリなどの木の実を入れ、発酵させたのが「猿酒」です。ある山の猿は、隠し味にガマズミの赤い実を入れ、発酵させるのだそうです。だから、おらが山で見つかる猿酒は日本一美味しいのだと自慢している山小屋の主人にお会いしたことがあります。勿論、最後は冗談と大笑いの席でした。

山林には、「ズミ（バラ科）」とよばれる落葉樹があります。春、桜のように枝先に白い花を咲かせます。つぼみは淡紅色で目立ちます。夏から秋にかけて黄色い実をつけますが、その実の味が酸っぱいので、“酸味”がズミになったといわれています。ガマズミやズミは、共に果実の酸味が名の由来になった植物です。

ただし、ガマズミの赤い実やズミの樹皮を染料として使うこともあることから、「染み（ずみ）」が由来とも考えられます。

6 生息場所が名前の由来

①ハキダメギク（キク科）

植物名としては、ヘクソカズラに次いで気の毒な名が付いた植物です。掃溜めのような汚い場所に咲くので、「ハキダメギク」とよばれていますが、ルーペで観察すると、多数の黄色の筒状花を5枚の舌状花が取り囲んで咲き、その美しさからその名は想像できません（写真44）。荒れ地に生えるキクの仲間の意味で、この名が付けられたようです。実際、道路わきや工事現場のわきなどでよく見かける植物です。



写真44：荒れ地に生えるハキダメギク

戦前の昭和初期に熱帯アメリカから渡来した帰化植物で、人手の加えられた場所に先駆的に生える植物の一種です。

②サクラ（バラ科）の仲間

○フジザクラ

サクラの名の由来ほど多岐に渡るものはないかもしれません。しかし、どの説も稲作文化や古事記（日本書紀）に登場する神々に名の由来が関係しているようです。

サクラの象徴となる神様は「このはなさくやひめ木花開耶姫」で、開耶姫の“さくや”が「サクラ」の語源といわれています。このお姫様は、富士山の女神としても知られ、全国のせんげん浅間神社の神として祭られています。浅間神社の賽銭箱に桜の彫り物があるのも、この理由からです（写真45）。この姫が雲に乗って富士山の上空で種を蒔いたとき、富士山の麓に咲いたサクラが「フジザクラ（富士桜）」だそうです。



写真45：須走浅間神社の賽銭箱の桜の紋

フジザクラは小型の花がまばらにつくサクラで、富士山麓を中心に分布しているので、

その名があります。公園などにも植えられています。派手さがないので花が咲いても気付かれないこともあります（写真46）。



写真46：花をまばらに咲かすフジザクラ

木花開耶姫は、稲作の豊穰を司る神様と結ばれます。このことから、サクラと稲作の関係の親密さがうかがえます。田植えの時期をヤマザクラが咲くことで知り、サクラの咲き具合で豊作を占ったり、サクラの木に豊作を祈願したりする習慣もあったようです。現在に伝わる「花見」は、この豊作祈願が源という考えもあります。

稲作との関係では、サクラの“サ”は「^{さき}早苗」, 「^さ早乙女」, 「^{さつき}五月」の“さ”で穀物の霊（穀霊）を意味し、“クラ”は^{かぐら}神楽で稲の神が鎮座し宿るところを意味しています。サクラの咲き具合で稲の豊作の吉凶を占うのも、神とサクラの関係をよく示しています。

神との関係では「亀甲占い」で、甲羅を焼くのに使われる薪は、「ハハカ」とよばれる「ウワミズザクラ」を使います。ヤマザクラもハハカとよばれることがありますから、身近なサクラは神秘的な植物として扱われていたようです。

また、神話のなかの歌の「さきくにさくらん ほきくにさくらん」から、“さくらん”がサクラになったという説や、花がうららかに咲くことから“さきうらら”がサクラになったという説など、多くの説がサクラの名の由来にあげられます。

○ソメイヨシノ

公園に植えられる代表的なサクラのソメイヨシノは、江戸時代の末期に現在の東京都豊島区駒込あたりの「染井」とよばれる地域に多くいた植木職人の1人が、オオシマザクラとエドヒガンザクラを掛け合わせてつくりだしたといわれています。その地名から「ソメイヨシノ」とよばれています。

初めは「ヨシノ」の名を付けましたが、奈良県吉野山のヤマザクラと混同するので、染井の地名を入れて、明治時代にソメイヨシノと名付けられました（写真47）。ソメイヨシノは、葉が出る前に花がたわわに咲くことから人気があり、北は札幌、南は沖縄付近まで、全国に広まりました。



写真47：絢爛豪華な花が咲くソメイヨシノ

しかし、寿命が70～80年と短く、公園などでも老木が目立ち、安全のために植え替えが必要になってきています。全国に古くから伝わるサクラの名所がありますが、その多くは寿命の短いソメイヨシノではありません。奈良県吉野山のサクラはヤマザクラですし、長野県高遠のサクラはコヒガンザクラです。東京都小金井のサクラもヤマザクラでした。近年、新しくサクラの名所になっている公園にはソメイヨシノが植えられていますが、古くからのサクラの名所は、ヤマザクラ系かヒガンザクラ系が主流となっています。

○オオシマザクラ、エドヒガンザクラ

ここで、ソメイヨシノの親となったオオシ

マザクラとエドヒガンザクラについても紹介しましょう。オオシマザクラは、伊豆諸島から伊豆半島に生息するサクラなので、オオシマザクラの名が付けられました。葉が出るのと花が咲くのが同時で、白色に近い薄いピンク色の花を咲かせます（写真48）。花より緑の葉が目立つ気がします。この葉は無毛で柔らかいことから、塩漬けにして餅を包んだ桜餅などの和菓子に使われます。



写真48：葉の緑が目立つオオシマザクラ

エドヒガンザクラは、江戸で見られたヒガンザクラの意味です（写真49）。春の彼岸の頃に花が咲くことから、ヒガンザクラは「彼岸桜」の意味です。葉や花の柄は有毛で、ソメイヨシノの葉柄や花柄に毛があるのも、エドヒガンザクラの形質が遺伝したものです。ヒガンザクラは寿命が長く、観光名所の樹齢数百年の古木のサクラの多くはヒガンザクラです。また、垂れ桜の古木もヒガンザクラの仲間が殆どです。



写真49：江戸の庶民に親しまれたエドヒガンザクラ

○カワツザクラ

身近なサクラで、近年人気が出てきたのがカワツザクラです（写真50）。伊豆の河津で発見され、河津を中心に伊豆半島で広がっています。他のサクラより開花時期が早く、たわわに咲く赤みの濃い花は春爛漫を思わせませす。

河津で偶然発見された1株から増えたといわれていますが、オオシマザクラとカンヒザクラが交配された雑種と考えられています。



写真50：伊豆の河津で発見されたカワツザクラ

カンヒザクラ（寒緋桜）は、沖縄などの暖かい地方で初春に咲くサクラです（写真51）。ヒカンザクラともよびますが、ヒガンザクラと混同しやすいので、現在は「カンヒザクラ」とよばれています。朱色の目立つ花を咲かせますが、花はやや筒状で大きく開花することはありません。カワツザクラの花が赤みを帯びているのは、カンヒザクラの朱色の花の色の形質が遺伝したものと考えられます。沖縄地方での花見は、このサクラの下で行われます。



写真51：花の朱色が目立つカンヒザクラ

③ミゾソバ (タデ科)

タデ科の植物で人気があるのは、ソバです。実が正四面体で三角形の面の縁が角ばっていることから、稜^{かど}の意味で「ソバ」とよばれています。そのソバの花によく似ている花を咲かせるのがミゾソバです (写真52)。



写真52：葉が牛の額に似ることからウシノヒタイの別名をもつミゾソバ

ミゾソバは、川岸や池、水田などの水辺でよく見かけます。溝の水辺に生えるソバの花に似た植物なので、「ミゾソバ (溝蕎麦)」とよばれています。

ところで、初秋の頃、白とピンクの可憐な花をつけているミゾソバの茎をつかんで根を引き抜いてみてください。先が細くなっている根とは違い、先に楕円の白い花の蕾 (閉鎖花) をつけた細い茎 (地下茎) を発見することがあります。地上ではなく、地下にも花をつけているのです。溝地の柔らかい土に適応しながら繁殖地を広げ、溝を覆って逞しく生きている植物です。

7 人々の生活との関わりが名前の由来

①タネツケバナ (アブラナ科)

稲作の工程に関係した水田雑草のなかで、田植えの作業に直接影響することから名が付いたのがタネツケバナです。この植物は、田

や畦に限らず、公園や花壇にも生えることから、一般的な雑草としても知られています (写真53)。春に白色の小さな十字の花をつけます。十字の4枚の花弁が目立つ花はアブラナ科の特徴です。摘んでおひたしなどの野草料理にも使われますが、癖のないおいしさはハコベに似ています。



写真53：稲作に関係した名の付いたタネツケバナ

春にこの花が咲き始める頃、稲作農家では稲粃を樽の中の塩水に入れます。結実した粃は底に沈み、結実できなかった粃は軽いので浮いてしまいます。浮いた粃は捨て、結実して沈んだ粃を苗床に植えて発芽させ、田植えに使います。農家でこの作業が行われる頃に花を咲かせることから、「タネツケバナ」とよばれています。

②ミソハギ (ミソハギ科)

夏の終わり頃、小川や池の岸辺の湿地で、茎の先に赤紫色の小花を多くつけた植物を見かけます。地下茎で増えて、花が湿地を広く覆い尽くしていることもあります (写真54)。花がマメ科のハギ (萩) に似て、溝の湿地に生えるので「溝萩」が「ミソハギ」に転訛したといわれています。

しかし、方言で「精霊花」ともよばれています。このことは、単純に見かけの姿や形だけで植物名が付けられたのではなく、儀式などの人々の生活との関わりが名の由来になっていることを示しているように思えます。長

野県では昔、新しい壺にミソハギを活け、壺の水をミソハギにつけて人などを叩くことがあったようです。また、盆花としても使われ、精霊から人へと禊みそぎにこの植物を使い、身を清めたともいわれています。禊に水を使うことから、水辺に生えるミソハギは利用しやすい植物といえそうです。このことから、ミソハギは溝萩の意味ではなく、禊がミソハギの名の由来になったとも考えられています。



写真54：禊に関係があると思われるミソハギ

③クスノキ (クスノキ科)

クスノキは九州、四国、本州の暖地に生息し、街路樹や公園などによく植えられている常緑樹です。クスノキ科の特徴で3本の葉脈が目立ち、葉には独特の香りがあります（写真55）。また、防虫剤の樟脳しょうのうの原料になり、薬の木として役立っていました。佐賀県は江戸時代から樟脳の産地として知られ、現在はクスノキが県木になっています。このように薬に使われた木なので“薬の木”が「クスノキ」に転訛したといわれています。



写真55：薬の木が名の由来のクスノキ

また、台湾ではクスノキを「ラクス」とよぶようです。南方からこの言葉が伝わってきて、“ラクスの木”がクスノキの語源になったとも考えられています。

④フキ (キク科)

フキは雌雄異株で、花であるフキノトウは舌状花ではなく、管状花（筒状花）からできています。雄花は黄白色で雌しべがあるが、結実しません。雌花は白色で、殆どが雄しべをもちません。食用としたときの味は、雌雄とも変わりません。近年、フキノトウには毒素のフキノトキシンが含まれていて肝臓がんを引き起こすといわれています。茹でれば心配ないので、生食を避けるようにしたいものです。また、葉柄部にはフキノトキシンは含まれていません。フキノトウとは別に、葉があとから芽を出します。この特徴は珍しく、花が先に咲くヒガンバナ科の植物に似ています。

フキの葉柄の中の空洞を、子どもが吹いて遊んだことから“吹く”が「フキ」になったといわれています。しかし、生活のなかで、大きな葉がものを拭くのに使われることが多く、尻を拭くのに使われました。このことから、“拭く”が「フキ」の名前の由来になったという説が一般的になっています。

北海道などにはフキの変種で背丈が2mにもなるアキタブキ（写真56）があり、葉柄を砂糖菓子などにします。葉も大きく、葉を5～6枚重ねて葉の間に米と水を入れ、飯炊きにも使われます。野宿で仮屋の屋根に葉を葺いたことから、“葺く”が「フキ」になったとも考えられます。



写真56：背丈2mになるアキタブキの葉

8 身近な植物名の由来一覧(五十音順)

○木の名の由来

アカシデ (カバノキ科)

新芽が赤く、春の新葉も赤い。また、しめ縄に垂らす和紙で作ったしでに果実が似ることが名の由来。

アカメガシワ (トウダイグサ科)

庭や公園に植えられる落葉樹。春の新芽が赤く、葉が柏に似ていることが名の由来。

イチヨウ (イチヨウ科)

「いちよう葉」がイチヨウになったのではなく、葉の形を鴨の足に例えた中国語の「鴨脚」というよび方が日本に伝播したことが名の由来。

イヌシデ (カバノキ科)

“イヌ”には「似るが本物ではない」や「役立たず」の意味がある。“シデ”の由来はアカシデの項を参照。

ウツギ (ユキノシタ科)

旧暦のうづき卯月に花を咲かすので、「ウツギ」になった。また、茎が空洞なので“空木”から「ウツギ」とよばれた。さらに、古来から木釘として使われているので、“打ち木”が「ウツギ」となったという説もある。

エゴノキ (エゴノキ科)

果実を食べると、果皮に苦みがあり、喉を

刺激して“えごい”ので、“えごい木”から「エゴノキ」になった。えごい味は、エゴノキサポニンという毒成分による。

エノキ (ニレ科)

神が宿る木として考えられ、粗末に扱うと祟りがあるので、“祟りの木”が「タタエノキ」となり「エノキ」に転訛した。神がかり的な木で、街道の塚に植えられたのには、旅人の安全祈願の意味がある。

カキ (カキノキ科)

実が赤く輝き、暁色になることから、あかつき“暁”の読みが短縮され、「カキ」になったといわれている。

カツラ (カツラ科)

落葉に醤油の香りがあるので、「醤油の木」の俗名がある。“香木(カツラギ)”が「カツラ」に転訛した。葉がフタバアオイに似るので、葵祭で宮司が襟に枝を刺す。

キンモクセイ (モクセイ科)

黄色の花がキン(金)で、幹が動物のサイ(犀)の肌に見える木で、“木犀”を「モクセイ」と読んだ。

クヌギ (ブナ科)

雑木林の木を代表する落葉樹。景行天皇が国の木と定めたことから、“国木”が「くぬぎ」と転訛した。

クリ (ブナ科)

朝鮮でのクルKulというよび方が、日本に伝播してきたと考えられている。

クルミ (オニグルミ) (クルミ科)

昔、大陸の呉の国から渡来した“呉実”が「クルミ」の名の由来となった。また、丸い実がクルクルと転がるので、「クルミ」となった説もある。オニは大きいの意味。

コナラ (ブナ科)

“ナラ”は新芽が毛深く、「なめらば滑葉」の意味。コナラは、“小さい檜の木”の意味。

サザンカ (ツバキ科)

日本でつくられた漢字の名(※漢字名)である「山茶花」を読んで、サザンカとなった。ただし、漢名(中国の漢字の名)で「山茶」はツバキを示し、「茶梅」がサザンカを示す。

サンショウ (ミカン科)

「山椒」の椒は辛い果実の意味で、山に生える辛い実のなる木の意味。胡椒も同意。

タイサンボク (モクレン科)

漢字名の「泰山木」,「大木」の読みが名になる。アメリカ南部原産で木、葉が全体に大きいという意味で“泰山”が用いられた。「大きい木」の意味。

ツバキ (ツバキ科)

葉が厚いことから「厚葉木」が語源となった。また、葉が艶々していることから「艶葉木」が語源という説もある。

ネズミモチ (モクセイ科)

街路樹や公園などで見かける。夏に暗紫色の卵形の小さい実を枝先にたくさんつける。その実をネズミが食べる餅に例えた。実が丸いのは「トウネズミモチ(唐鼠餅)」。

ハギ (マメ科)

茎を切ると翌年、古株から新芽が多数出る。新芽が沢山生えるので“生え木”が「ハギ」に転訛した。

ハゼ (ウルシ科)

古名の「はじの木」の“はじ”が「はぜ」へ転訛した。埴色の染料で、“はに”が「はぜ」に転訛した説もある。

ヒノキ (ヒノキ科)

神事で、ヒノキの板の上でウツギの茎や枝の先を接触させながら回転させ、摩擦熱で火を起こすときに使ったことから、“火の木”が「ヒノキ」の名の由来になった。

モチノキ (モチノキ科)

樹液を集めて煮ると餅のようになる。それ

を鳥を捕まえる「鳥もち」にしたことから、「モチノキ」という。

○草の名の由来

アイ (タデ科)

藍染の原料になる。アオ(青)が「アイ」に転訛した。また、“青が居る”が「アイ」になったともいわれる。

アザミ (キク科)

葉に棘があり、触ると痛くて驚くことから、大言海に「とげ多きあざむ」と表記されている。“あざむ”は驚くの意味で「アザミ」に転訛した。

アマドコロ (ユリ科)

春、小形の花を茎の下に連ねて咲かす。花の連なりを鳴子に例えたナルコユリに似るが、アマドコロは茎に稜があり、角ばっているので区別できる。アマドコロは「甘ドコロ」で、トコロに似た根に甘みがあることによる。

アヤメ (アヤメ科)

剣型の細長い葉がいくつも縦に並んだようすを「文目」に例えた。また、外花被の花弁(萼)の模様が網目模様なので「アヤメ」とよぶ説もある。

イタドリ (タデ科)

効き目はないようだが、痒く痛みを取り除くことから、“痒取り”が「イタドリ」になった。

イチハツ (アヤメ科)

アヤメの仲間、初夏に最初に咲くので一初、最初の意味で「イチハツ」とよばれる。

イノコズチ (ヒユ科)

茎の節(葉が出る部分)がイノシシの膝小僧に似るので、“猪の子榎”が名の由来という。

エノコログサ (イネ科)

穂が子犬の尾に似るので、“犬の子”が「イヌコロ」,「エノコロ」,「エノコログサ」とな

った。他にネコジャラシや粟のような穂をもつので、「アワグサ」の俗名がある。

エビネ (ラン科)

春、やや日陰の林床に咲くランの仲間。根の節の連なりが、エビの尾に似るので“海老根”でエビネとよばれる。

オオバコ (オオバコ科)

葉が大きく広いので、“大葉子”が「オオバコ」になった。葉を火で炙ると蛙の喉のように膨れるので「カエルツバ (蛙葉)」の俗名がある。

オヒシバ (イネ科)

日当たりのよい野原に生え、茎が扁平で踏まれても強く伸びる芝のような草なので、“雄日芝”で「オヒシバ」とよばれる。茎が丸く姿が弱々しく見えるのが“雌日芝”で「メヒシバ」とよばれる。

カヤツリグサ (カヤツリグサ科)

稜形の茎を2人で裂くと四角形の「蚊帳」に似た形になるので、“蚊帳釣り草”で「カヤツリグサ」とよばれている。

セイタカアワダチソウ (キク科)

北米から渡来した帰化植物である。地下茎から成長抑制物質を出し、他の植物を排除して増えた。特に、ススキとの生存競争は有名である。実際は、自身も成長抑制物質に影響され、無限に増えることはない。“背高泡立ち草”で花が泡のように咲くことに由来。よく似た「オオアワダチソウ」は、葉がざらつかないので区別できる。

ハコベ (ナデシコ科)

春の七草の「はこべら」である。古名の「はくべら」や「ほこべら」が「ハコベ」に転訛したと思われる。

ヨメナ (キク科)

優しく美しいので“嫁菜”が「ヨメナ」になったといわれる。また、この植物が生える

と嫁が料理で忙しくなるので、“嫁泣かせ”が由来の説もある。

ヨモギ (キク科)

草餅やもぐさの原料になる。乾燥すると“よく燃える草”なので「ヨモギ」とよばれる。

※漢字名、漢名、和名

漢字名：日本でつくられた漢字を使った植物名

(例：初春に咲く木の花だから椿)

漢名：中国で植物名を漢字で示したもの

(例：「山茶」が中国では椿の意味)

和名：日本で標準的に使われている植物名

(通常はカタカナで書く)

(例：ツバキ)

【著者】

富田 広

東京都多摩市立東愛宕中学校 前校長

独立行政法人 科学技術振興機構 主任調査役

続・楽しい植物
観察入門

身近な有毒植物 20種・植物名の由来

